

塾長雑感

多浪生・落ちる生徒の特徴 何が求められているか

どんな人が試験に落ちるのでしょうか。まず、勉強をやっていないという生徒が大半を占めます。やっていないというのは、勉強量も勉強の質もどちらも不足しています。これではお話になりません。復習不足もここに含めることにします。頭の中に知識が入っていないまま、色々な教材を解き散らかしたり読み散らかしたり、プリントに浮気したりします。これでは解けない問題が増えるだけです。知識を常識化するまで覚えなおします。完全に覚えられないのなら100周でもすることです。そうしているうちに記憶力は強化され、より少ない周回数で覚えられるようになります。

次は日本語能力の不足です。やむを得ない部分もあります。いわゆる頭の良さ、地頭というものです。これを上げるには、頭の良さ自体を強化する以外にありません。ある程度は勉強を本気で頑張っていけば徐々に上がってくるものです。しかし、地頭がないとどうしても無い限界にあたることもあります。限界を突破し地頭の能力そのものを上げるには、究極にして唯一の方法があります。本一冊まるごと、解説の文章ごと覚えることです。すなわち、頭の中に辞書アプリとして入ってる感覚になるまで反復します。こうすると魂のステージが上がり同じ思考や読解ができるようになります。

他に多いのは、話を聞かないというものです。たとえば、英語は意味がわからなかった後音読を推奨または義務とする先生が多いですが、何故かやろうとしません。付箋の使い方を教えても、自己流に走ろうとします。その勉強をしたら落ちるだろう、その本をやってはいけないと警告しているのに自爆していきます。これらの生徒はまさに才能が無いと断言します。スポーツでも芸術でも同じです。勉強は特にそうです。逆に才能がある人、つまり天才とは、飽きずに同じ作業をやり続ける人のことです。師匠のやり方を聞かないタイプの生徒は、4回でも5回でも入試に落ち続けます。学校でダメだった。河合塾でダメだった。東進でダメだった。この家庭教師でダメだった。でも、ある時、師匠の言う通りに1科目やり続けてみようとしたとき、成果があらわれます。そして初めて、正しかったと気づくものです。自分が経験してから過ちに気付くより、落ちる前に、知識で回避すればいいだけです。誰を信じればよいか。「先生自身が成長したやり方」では無く、「生徒を成長させた確証のあるやり方」で教えてくれる師匠ならば、誰でも良いといえ良いのですが、二人以上の言うことを混ぜてはいけません。相反するやり方もあるので、悪影響です。学習当初から受験日まで、師匠は必ずひとり。変えてはいけません。

大げさに言うタイプ、逃げ思考の性格の人は落ちます。所詮ただの試験です。解答がある命題にすぎません。東大理Ⅲでも、単に合格点分問題とけるようにしていけばいいだけの話です。(*なおこの突破は、英数は高2までに終わらせ、かつ物理化学で100/120以上取得が基本方針) 世間でいう難しい試験の合格者の大半は、それが偉大なことだとか、超難しいとか思ってはいません。試験を大げさな言い方で難しいなどと自ら発言すると言い訳思考になり、行動もひっぱられてしまい、落ちます。逃げ思考とは、苦手な科目があれば避け、解けない問題があれば放置し、難しい大学だと思えばランクを次々と下げるといった思考です。勉強とは、出来ないことを出来るように「勉めることを強いる」ことです。出来ないものは出来るように、苦手なものは得意に、大学のランクは上へ、と解決していくことが勉強です。この性格を治療するには、一度なにかの科目と単元に超集中し成功体験をつかむことです。

高難易度のマニアなことに走る人も落ちます。それが受験の範囲に必要な問題か考えられていないからです。もちろん、趣味としてやるのは構いませんが受験とは別でしましょう。数学のノーベル賞であるフィールズ賞をとった広中先生は、受験数学に挑戦した結果、問題が解けず、「これはただのテクです。技術がないと解けない問題です。」と答えています。フィールズ賞の広中先生は世界屈指の数学者です。ハーバード大学名誉教授もつめています。何故、高校生が受ける試験の数学が解けなかったのでしょうか。答えは簡単で、受験の数学、すなわち学校でやっている数学は、何百年何千年も昔の「古代の数学に無理やりクイズ要素を追加した問題」に過ぎないからです。教育課程で履修する範囲が決まっているので、それより高度な数学を使用した問題は作れません。しかし入試でふるい落とす道具として難しい問題が必要です。そこで、古代の数学にクイズ要素を追加しているだけです。入試に出ないことを研究し続けると得点が下がります。たとえば数学でいうと問題が作成された背景知識の流れを研究するといった類です。微積ですら何百年と前の昔の数学です。なお、今の最先端の数学者は超々高度なことをやっています。

広中先生の受賞「標数0の体上の代数多様体の特異点の解消および解析多様体の特異点の解消」

入学試験とは、学校側がこういう学生に来て欲しいとするメッセージでもあります。範囲を超えて学習するということは、メッセージを読み取れていないということです。落ちるのは必然です。学校の勉強だけで入試の勉強をしていない生徒然り。入試の勉強、つまり、こういう生徒に来て欲しいというメッセージにこたえるための努力をしていないというわけです。

片岡先生の受験生応援企画コーナー

文系センター試験地学・過去問カバー率調査

こんにちは片岡です。暑い日が続きますがみなさん体調は万全でしょうか。

さて本日は、「10日あればいい！短期集中ゼミセンター地学基礎(実教出版)」というペラペラの薄い本(全64ページ!)が、実際のセンター試験問題を一体どのくらいカバーしているのか調査しましたので、みなさんにお伝えします。

※ここで言う「カバー」とは、当該書籍から得られる知識をもって、実際にセンター試験に出題された問題が解けるかどうかで判断しています。

調査範囲：地学基礎が開始された2015年から2019年までの計5ヵ年分(追試含む)

カバー率(小数第一位四捨五入)

2015年	本試93%	追試87%
2016年	本試93%	追試93%
2017年	本試87%	追試93%
2018年	本試93%	追試73%
2019年	本試100%	追試100%

137/150問

トータルカバー率 91.3%!

ページ程度の参考書(文系のためのセンター地学・地学基礎が面白いほどわかる本、など)を併用、もしくは先に通読しておくのが望ましいでしょう。

表のように、非常に高いカバー率を誇っています。ただし、この本で学習する上で注意点がいくつかあります。一つは、中学校までの数学と理科をマスターしておくことです。地学基礎では例年、中学レベルの数学と理科の知識を使う計算問題が出題されますが、本書ではそのあたりの説明はありません。特に指数、割合、単位の変換などはよく使います。

もう一つは、解説のページだけではなく練習問題を解きながら知識を身に付けていく必要があることです。また、学校等で通って地学基礎の授業を受け、ある程度用語などを知っている生徒を対象にしたような構成です。完全に知識ゼロの状態から始めるならば一般的な300



この本だけでも極めれば9割がとれます。これにインプット本と過去問を併用・周回して短期で満点を目指しましょう。